慢性上顎竇炎ノ臨床的統計

九州醫科大學耳鼻咽喉科教室

井上庸三
緒方大象

Klinische Statistik der Sinuitis maxillaris chronica aus der Universitäts-Ohren-, Nasen- und

Halssklinik in Fukuoka (Prof. Dr. I. Kubo) 1. I. 1911—31. XII. 1912 von y. Inoue u. D. Ogata,

Fukuoka, 1913.

副鼻腔ノ疾患ニ就キテハ既ニ二百年以前叙説セラレタルコトアレドモ詳細ナル研究ニ至リテハ僅々三十年ノ歴史ヲ有スルニ過ギズ殊ニ上顎竇疾患ニ關シテハチーム (Ziem. 1886)ガ想像以上ニ多數ナルベキヲ唱フルニ及ビ其研究モ俄ニ其歩ヲ進メタレド統計的報告等ニ至リテハ極メテ寥々タルモノニシテ確實ナルモノ甚少シ、

ユーラシ (Jurasz)ハ其著上氣道疾患 (Krankheiten der oberen Luftwege)ニ於テ1882—1889ノ八年間ニ予ノ「クリニク」ニテ確實ナル診斷ヲ下シ得タル上顎竇炎ハ五例ニ過ギズ内三人ハ男二人ハ女年齡ハ十九歳ヨリ五十歳ノ間ニ在リシト云ヘリ

其後現レタル臨床的統計ノ主ナルモノヲ年次ニ從テ舉グレバ略左ノ如シ、

(一) ゲルベル (Dr. Gerber.) 1892—1897 ノ六年間ニ外來患者總數一〇三四〇ニ對シ慢性上顎竇炎ヲ有スルモノ一二三六即一・三%

(二) クーン (Prof. Kuhn) 1856—1897 ノ一十年間ニ外來患者四六一二、上顎竇炎ヲ有スルモノ二四即〇・五%、入院患者六二九、上顎竇炎ヲ有スルモノ一二即一・九%。

(三) アレキサンデル (Dr. Franz. Alexander) 1899 外來患者二六二六上顎竇炎ヲ有スルモノ一三即〇・五%、入院患者七六八中上顎竇炎ヲ有スルモノ一一即一・五%。

(四) ケルネル (O. Körner) 1901 外來患者二六一七中上顎竇炎ヲ有スルモノ一五即〇・五%。

(五) シーベンマン (Siebenmann) 1898 以來四回ノ報告アリ。

外來患者

上顎竇炎ヲ有スルモノ

「プロセント」

1898	一二六五	一四	一・〇%
1899—1900	三四〇八	四三	一・二%
1901—1902	三六八七	五九	一・六%
1903—1904	四八五七	五五	一・一%

入院患者 上顎竇炎ヲ有スルモノ

1898	一五二	六	三・九%
1899—1900	三四〇	一四	五・〇%
1901—1902	三三六	二七	八・〇%
1903—1904	四七八	四八	一〇・〇%

即外來患者ニテハ一・六%最多ク入院患者ニテハ一〇・%最多シ、尙(五)ニテ注意スベキハ外來タルト入院タルトヲ問ハズ年次ト共ニ慢性上顎竇炎患者ノ「プロセント」増加セルコトナリ。

屍體解剖上ノ統計ニハ左ノ如キモノアリ。

マルチン (Martin) ハ1900三十一例ノ屍體解剖ヲ行ヒ十例即三二・〇%ニ上顎竇蓄膿症ヲ見タリ次デウエルトハイム (Wertheim) ハ1901三六〇ノ屍體ニ就キ詳細ナル研究ヲ遂ゲ其四六例即一二・八%ニ於テ上顎竇「エムピエーム」ヲ證明シ且曰ク此疾患ハ男女共殆ンド同一ノ割合ニ侵サル年齡ニ對シテハ一〇歳最少ク四・一%一〇—二〇歳最多ク三七・五%七〇—八〇歳ハ其次ニ位シ三四・五%其他ハ一八・八—二八・八%ノ間ニ在リトセリ

オッピユーフエル (Oppikofer) ハ四〇〇ノ屍體解剖中一一一即二七・八%ニ上顎竇炎ヲ見、内三五ハ兩側侵サレタルコトヲ報告セリ。

以上三氏ノ報告ニヨレバ最少一二・八%ニシテ前述數氏ガ臨床上ノ報告ニ比スレバ甚シキ懸隔アリ、

コレ解剖ニ於テハ其材料ニ關スルコト換言スレバ其死因及屍體ノ一般狀態ニ關スルコト大ナレバナリ
 ウエルトハイム氏ハ多クノ場合ニ於テ死亡前數時間ニ鼻腔検査ヲ行ヒ膿ヲ認メザリシモノガ剖見時多
 量ノ膿溜セルコトヲ發見シタリマルチン氏モ亦屍體ニ於テハ十數倍ノ増加ヲ見ルト云ヘリ故ニ解剖
 上ノ統計ハ臨床上ノ統計ト一致スルコト難シ。

予ハ今九州帝國大學醫科大學耳鼻咽喉科教室（教授久保博士）ニ於テ最近二年間（1911—1912）ニ於
 ケル慢性上顎竇炎ノ臨床的統計ノ概略ヲ左ニ掲グベシ、

一、一般患者及鼻疾患者ニ對スル割合

一般患者

鼻疾患者

上顎竇炎患者

1911

四〇八四

二一九八

六〇四

1912

四一〇八

二二五二

四七三

即 1911（明治四十四年）度ニ於テハ全患者ノ一四・七％鼻疾患者ノ二七・五％ 1912（明治四十五年）度
 ニ於テハ全患者ノ一一・五％鼻疾患者ノ二一・九％ハ上顎竇炎ヲ有スルコト、ナル而シテ嘗テ久保博士
 ガ日新醫學上ニ報告セラレタルモノ（1909及1910年度）ト大差ナシ、右ノ内六〇四并ニ四七三ハ臨床上
 慢性上顎竇炎ト診斷シタルモノノ總計ニシテ其内四十四年度ニテ六〇四中四一四、四十五年度ニテ四
 七三中二九七ハ上顎竇洗滌ノ機會アリテ確實ニ膿ノ溜溜ヲ證明シ得タリ、以上ヲ前述諸家ノ報告ニ比

スルニ「プロセント」一見甚大ナルガ如キモ今日此疾患ニ對スル診斷法ノ進歩セルコト、鼻疾ノ主訴ナ
キ患者ニ就キテモ常ニ精細ナル鼻腔検査ヲ行ヒ來リシコトヲ思ハゞ其理モ亦自ラ明ナルベシ。
二、性別男ニ多シ、然レドモ一般患者モ亦男患者多キヲ以テ之ニ對スル割合ヲ比較スルトキハ甚相
近シ。

外來、患者

1911

男三八四

全男患二七〇一ニ對シ

一四・二%

女二二〇

全女患一三八三ニ對シ

一六・六%

入院患者

男 七一

全男患者二一四ニ對シ

三三・二%

女 二四

全女患 八三ニ對シ

二八・九%

外來患者

1912

男三一八

全男患二八〇九ニ對シ

一一・三%

女一五五

全女患一二九九ニ對シ

一一・九%

入院患者

男 七二

全男患二四〇ニ對シ

三〇・〇%

女 二三

全女患 九二ニ對シ

二五・〇%

三、年齢別ウエルトハイム氏ハ〇—一〇歳ニ少ク一—二〇歳ニ多キコトヲ説明シテ曰ク〇—一〇歳ニテハ副竇尙全ク缺如スルカ或ハ發育不充分ナルガ爲ナリ一—二〇歳ニ最多キハ此年齢ニ至リ最屢上顎竇炎ノ原因トナルベキ急性傳染性疾患ニ罹リ易キガ爲ナリトセリ予ノ場合ニ於テハ最少ハ八歳最長七十二歳之ヲ十年毎ニ分チ見タルニ其結果ハ殆ウエ氏ノモノト一致シ〇—一〇歳ニ最少ク一—二〇歳又ハ二—三〇歳ニ最多ク其他ハ年齢ノ増加スルト共ニ漸次減少スルコトヲ見タリ。

外來患者ニツキテ

	〇—一〇	一一—二〇	二一—三〇	三一—四〇	四一—五〇	五一—六〇	六一—七〇	七一—八〇	八—九〇
1911	四	二五三	一九四	八九	四〇	二	三	一	〇
I (三六)	(一一三)	(一二六)	(六五)	(四四)	(三六)	(一一三)	(九)	(三)	
一・二%	三三・五	一七・三	一四・五	九・〇	七・三	二・七	一一・一	〇	

入院患者ニツキテ

	〇	二九	三九	一九	五	二	一	〇	〇
II (二五)	(七四)	(九七)	(五六)	(二六)	(一一)	(六)	(二)	(〇)	
〇% 三九・二	四〇・二	三三・九	一九・二	一八・二	一六・七	〇	〇	〇	

外來患者ニツキテ

1912

九

一八六

一五七

六〇

三〇

二一

七

三

〇

III

(五三)

(二八五)

(九七〇)

(六五四)

(三二)

(一九)

(一〇三)

(一〇五)

(二)

一・八%

一五・七

一六・三

九・三

七・八

一〇・六

六・〇九

二・九

〇

入院患者ニツキテ

〇

四一

二九

九

九

七

〇

〇

〇

IV

(四九)

(九八)

(七六)

(四二)

(三九)

(二二)

(四)

(二)

(〇)

〇%

四一・八

三八・二

二一・四

二三・一

三一・八

〇

〇

〇

括弧内ノ數ハ同年齡ノ患者總數ニシテ「プロセント」ヲ以テ示シタルハコレニ對スル割合ナリ。
尙以上ノ關係ヲ曲線ヲ以テ表ハゼバ左ノ如シ

II.

III.

IV.

曲線 I 及 IV に於テ右端ニ近ヅキ却上行セルハ統計人員僅少ナルガ爲ニ起レル誤差ニシテ寧ロ例外ト見做ス方至當ナルベシ。

四、職業別

外來患者ニツキテ (總數六〇四)

農

工

商

學生

官吏會社
員教員等

雜

1911

一三四

四四

八〇

八九

五五

二〇二

一三・二%

七・三

一三・三

一四・四

九・一

三三・七

入院患者ニツキテ (總數九五)

一九

一二

一四

一六

二〇・〇

二四

二〇・%

一三・七

一四・七

一六・八

二一・一

一四・七

外來患者ニツキテ (總數四七三)

1912

一一一一

四四

五七

八九

四六

一一四

一六・%

九・三

一二・一

一八・八

九・七

二四・一

入院患者ニツテ (總數九五)

二〇

一一

八

三一

一九

六

原著—慢性上顎竇炎ノ臨床的統計 (井上・緒方)

—四五—

二一・一% 一一・六 八・四 三二・六 二〇・〇 六・三

右表ニ於テ著シキハ農夫及學生ニ上顎竇炎ノ甚多キコトニシテ前者ニ於テハ其生活狀態非衛生的ニシテ鼻疾患ヲ惹起スル危險ニ遭遇スルコト比較的頻繁ナルガ爲ナルベク、後者ニ於テハ第一年齡ノ關係上屢罹患スル外、他ノ職業トハ稍趣ヲ異ニシ平時頭腦ヲ使用スルコト多ク鼻疾患ニ因リテ起ル諸種ノ障害ハ直接ニ又適切ニ感ゼラレ從テ診療ヲ請フ者多キモ亦一因ナルベシ。

五、患側ペープ(Pape)氏ハ一三二例中一一例即八・三%ハ兩側侵側サレ居ルヲ見タリ、ウエルトハイム氏ハ四六例中一九即四一・三%、中田氏ハ五七例中三六%ハ兩側ニ著膿アリシコトヲ報告セリ予ノ場合ニ於テモ男女何レヲ問ハズ又長幼ト別ナク兩側同時ニ侵サル、コト最多ク七〇%ヲ超ユルコト多シ。

外來患者ニツキテ(總數六〇四)

兩側サレシモノ

左側

右側

1911

四六六

七九

五九

七七・一%

一一・一%

九・八%

入院患者ニツキテ(總數九五)

七一

一四

一〇

一七四・七%

一四・七%

一〇・五%

外來患者ニツキテ(總數四七三)

1912

三三六

六三

七四

七一・〇%

一三・三%

一五・七%

入院患者ニツキテ(總數九五)

六三

一五

一七

六六・三%

一五・八%

一七・九%

片側侵サレタル時左右何レガ多キカ、吾人ノ場合ニ於テハ明答ヲ與ヘ難キモ、先ヅ左右大差ナシト見テ可ナランカ。

六、他副竇炎合併 検査往々甚困難ニシテ總テノ場合ヲ網羅シ難シ、唯確實ナルモノノミヲ撰ビテ左表ヲ得タリ、コレニ依レバ前額竇炎最多ク蝴蝶骨竇之ニ次グ。

外來患者ニツキテ(總數六〇四)

前額竇炎

蝴蝶骨竇炎

篩骨蜂窩炎

前額及蝴蝶骨竇炎

パンジヌイチス

1911

二六

二

〇

〇

〇

四・四%

〇・三%

〇

〇

〇

原著—慢性上顎竇炎ノ臨床的統計(井上・緒方)

—四七—

原著—慢性上顎竇炎ノ臨床的統計（井上・緒方）

入院患者ニツキテ（總數九五）

一三	一	一	〇	〇
一三・七%	一・一%	一・一%	〇	〇

外來患者ニツキテ（總數四七三）

八	三	〇	三	〇
一・七%	〇・六%	〇	〇・六%	〇

入院患者ニツキテ（總數九五）

五	〇	〇	一	一
五・三%	〇	〇	一・一%	一・一%

七、患者主訴 慢性上顎竇ノ疑ヲ起サシムベキ訴全ク無クシテ鼻腔検査ニ際シ偶然發見シタルモノ
少カラズ故ニ患者ノ主訴ハ比較的診斷上ノ價值少キモノナリ。

	頭痛	鼻漏	鼻閉塞	局部疼痛	嗅覺障害	衄血	眩暈	記憶力減退	其他
1911	七九	三四一	二八二	二九	三六	八	四	五	八
1912	七八	一三〇三	二〇九	二〇	二六	一〇	六	四	五

即鼻漏ヲ訴フル者最多ク、ソノ多數ハ黃色粘稠ニシテ惡臭ヲ有スト言フ、鼻腔閉塞モ亦甚多シ、就中

鼻閉時々起ルコトヲ訴フル者多ク稀ニハ片側交互ニ閉塞スト訴フル者アリ、頭痛モ屢來ルモノニシテ普通ノ頭痛ノコトアリ、患側半部又ハ後頭部ニ限局セルコトアリ尙所謂頭痛ノ外頭部ノ重感又ハ壓感ヲ感ズルコトアリ、之等ヲモ含ム、局部疼痛ニハ鼻背、鼻根、下眼窩部、頰部前額部等ニ於ケル鈍痛ノ外、此等ノ部位ニ限局セル緊張感知覺異常等モ此中ニ加ヘタリ、嗅覺障害中ニハ脫失及減退アリ。入院患者ニテハ入院後、根治手術ヲ受ケタル者ノミニシテ無論上顎竇ノ洗滌ニヨリテ蓄膿ヲ證明シ診斷確實ナルモノノミナリ、今外來患者ニツキテ得タル統計表ト入院患者ノソレトヲ相比較スルニ大體ニ於テ全ク一致セルヲ見ルナリ。

結 論

以上ヲ綜合スルニ慢性上顎竇ハ

- 一、吾人ノ思惟スルヨリモ遙ニ屢遭遇スル疾患ニシテ予ノ場合ニ於テハ全患者數ニ對シ平均一二・一%鼻疾患患者數ニ對シ二四・七%ヲ占ム。
- 二、罹患者ハ男女ニヨリテ大差ナク男ニテハ全患者數ノ一二・八%女ニテハ一四・二%トナル入院患者ニツキテハ男三一・六%、女二六・九%
- 三、年齡ニヨリテ甚シキ相違アリ〇——〇歳ニ最少ク平均一・五%一一—二〇歳最多ク一九・一%、二一—三〇歳之ニ次ギ一六・七%以下年齡増加ト共ニ漸次減少スルガ如シ入院患者ニツキテモ其關係

ハ同様ニシテ〇—一〇歳少ク〇%、一一—二〇歳四〇・五%、二一—三〇歳三九・二%。

四、職業ニテハ農夫ニ最多ク二四・一%學生一六・六%、入院患者ニテハ農夫二〇・五%學生二四・七%ニシテ後者却テ上位ニ在リ。

五、兩側同時ニ侵サル、コト最多ク七四%、入院患者ニテハ七〇・五%ニ達ス、片側ノ時ハ左、一三・二%、右一二・七%、入院患者ニテハ左一五・二%右一四・二%ニシテ左側稍多キガ如キモ大差ナシト見テ可ナラン。

六、副竇中前額竇炎ノ合併最多ク上顎竇炎患者總數ノ三%（外來患者）ハ之ヲ有シタリ、入院患者ニテハ九・五%ニ當ル。

七、患者主訴ノ中最多キハ鼻漏及鼻閉塞ニシテ頭痛次ニ位ス就中鼻漏ハ最多ク常ニ半數ヲ超ヘタリ。

終ニ莅ミ終始懇篤ナル指導ト嚴密ナル校閲トヲ賜リタル久保教授ニ對シ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

LITERATURVERZEICHNIS.

1. Jurasz. Die Krankheiten der oberen Luftwege. S. 103. 1892.
2. Dr. P. H. Gerber. Statistisches und Casuistisches zur Rhino-Laryngologie und Otologie (7 Jan. 1892 bis 1 Jan. 1897) Monatschrift für Ohrenheilkunde. Jahrg. XXXII, N. 6. P.

3. Alfred Wintermantel. Bericht über die in den Jahren 1896 und 1897 behandelten klinischen und ambulatorischen Kranken (aus der Universitätsklinik für Ohrenkrh. zu Strassburg. Prof. Kuhn) Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 33, P. 24—38. 1898.
4. Dr. Fr. Alexander. Bericht über die im Jahre 1899 behandelten klinischen und ambulatorischen Kranken. Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 38 P. 342—350.
5. O. Körner. Bericht über die grossherzogliche Klinik und Poliklinik für Ohren-, Nasen- und Kehlkopfkranken zu Rostock. Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 39, P. 145—164.
6. Dr. E. Sporleder. Jahresbericht über die Tätigkeit der Universitäts-Poliklinik für Ohren- und Halskrankheiten und der otolaryngologischen Abtheilung des Bürgerspitals zu Basel (Prof. Siebenmann) vom 1 Jan. bis 31 Dez. 1898. Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 37, S. 14—50. 1900.
7. Dr. E. Oppikofer. Jahresbericht der oto-laryngologischen Klinik und Poliklinik in Basel vom 1 Jan. 1899 bis 31 Dez. 1900. (Prof. F. Siebenmann). Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 40. S. 204—259.
8. Dr. E. Oppikofer. Jahresbericht der otolaryngologischen Klinik und Poliklinik (Prof. Siebenmann) in Basel vom 1 Jan. 1901 bis 31 Dez. 1902. Zeitschr. f. Ohrenh. Bd. 47, S. 209—276. 1904.
9. Dr. F. R. Nager. Wissenschaftlicher Bericht der oto-laryngologischen Universitätsklinik und Poliklinik (Prof. Siebenmann) Basel vom 1 Jan. 1903 bis 31 Dez. 1904. Zeitschr. f.

- Ohrenh. Bd. 53, S. 150—233. 1907.
10. Martin. De la fréquence de l'empyème des cavités accessoires du nez. 1900. Ref. in Arch. f. ohrenh. Bd. 48, S. 304.
11. E. Wertheim. Beiträge zur Pathologie und Klinik der Erkrankungen der Nasennebenhöhlen. Arch. f. Laryng. Bd. 11. S. 169—234. 1901.
12. E. Oppikofer. Beiträge zur normalen und pathologischen Anatomie der Nase und ihrer Nebenhöhlen. Arch. f. Laryng. Bd. 19 S. 28—84. 1907.
13. 久保博士, 慢性上顎竇炎ノ診斷及所置ニ對スル最近ノ趨勢并ニ將來, 日新醫學第一卷二號 5. 127—173. 1911.
14. H. Pape. Über die Resultate der Caldwell-Luc'schen Operation zur Beseitigung der chronischen Kieferhöhleneiterungen. Zeitschr. f. Ohren. Bd. 63. S. 160—170. 1911.
15. 中田弓吉, 副鼻腔蓄膿症ノ統計的研究, 大日本耳鼻咽喉科會々報, 第十七卷, 第五號 S. 524—525. 1911.
16. A. Denker und W. Brünings. Lehrbuch der Krankheiten des Ohres und der Luftwege. S. 317—327. 1912.
17. Zarniko. Die Krankheiten der Nase und des Nasenrachens. S. 603—655. 1910.
18. Chiari. Die Krankheiten der Nase. S. 222—228. 1912.
19. Ph. Schech. Die Krankheiten der Mundhöhle, des Rachens und der Nase. S. 370—371. 1902.
20. M. Schmidt-E. Meyer. Die Krankheiten der oberen Luftwege. P. 253—294. 1909.
21. Heymann. Handbuch der Laryngologie und Rhinologie. 3. Bd. 2. Abt. S. 985—1096. 1900.